

千島の思出

館 脇 操

大正十二年の七月、私はひとりで國後に渡り、始めて千島の洗禮をうけ、その時すつかり北の海に魅されて、私の青春は一切千島に捧げてしまったといつても、過言ではない。もと／＼この柄であり、下手なところ

に青春をつぶすより得をしたかもしれないが、私の千島に對する感情は惚れたといつた方が適切なくらいで損得は、勿論問題外である。それに豫料の時から宗教書を讀んだり哲學の本をかじつたりして、いつか一度は全く孤獨的なところで思い切り冥(迷?)想に沈潜しきりたいロマンチズムさえなきにしもあらずであつたことを白狀しなければならぬ。そして北洋きつての名パイロット武宮榮一船長と、今は鹿児島水産學部長をしている山本清内船長とから千島漁場たりあるきの裏付をもらい、股旅の勘定は後付の御兩人まわしという虫のよいことにし、漁場から漁場を歩いたものである。従つて随分所々で色々な方々の御厄介になつてしまつた。それに中部千島でハリキツて論文材料集め

をしている間は、オットセイの主といわれた石野敬之さんが面倒を見てくれて、その間に北大出の名物男、中部千島の村長といわれた宮武克己さんとすつかり仲好しにもなつた。

大正十二年の國後をふり出しに、十五年から昭和四年迄を中部千島でくらし、北千島にも南千島にもよりその間に普通では行かれないオンネコタン温郷古丹、バルムコタン春牟古丹、シコタン子古丹、マカナルは勿論、エヌルマ磨勘留、ライコケイ越渴留磨、ライコケイ雷古計にも渡り、ムシル志林規にも上陸の時を得、昭和三年にはアリユウシヤン列島の中部アトカ島まで研究するチャンスをつかまえた。もうこうなれば北洋と私にはきつてもきれぬくさびがうちこまれたというべきである。その後昭和九年の初夏には色丹にあがつて島のすみ／＼まで歩き、十一年には國後島の古丹消、コタンケシ東沸以南をしらみつぶしに探り、十五年には擇提島のボロスから内保まであらゆる路をほつつきまわり、十六年には北千島三島の調査にのぼつた。回数は九回であるが、その間短

くとも半月、長い時は二月餘いたので磨勘留の西なる帆掛岩を除くと、知らぬ島はなく、千島だけは自分で満喫したつもりである。それゆえ戦後根室方面から或いは濱標津方面から幾度か千島を見ていつも深い感慨にふけらせられていた。戀女房に逃げられたらきつとこんな感じがするかもしれない。

霧のふりしきる占守島の別飛ベイトフの一夜、占守に生れ、占守に戸籍を有していた北の哲人別所君の所で會つた三原君から「何か千島の想出を書いてくれないか」と

の依頼が飛びこんだ一飯の恩讒を受けてある身であり、今更嫌といえた義理はない。殊に好きな千島ゆえ、惚れた弱味も手傳つて、ここに筆ををはしらせ、思出を綴る次第である。

1. 國後回想

角帽生活最後の夏、大正十三年の夏、私はひとりで根室をた



つた。どこからどこへというあてもない。唯全く囊中の沸底するまで國後を歩こうというのである。

霧に埋れたさいはての港根室の街の灯は、人里離れる旅愁をのせてうるおんでいた。國後島への船の出帆に大低夜の十時過ぎで、あの港のほのぐらい解乗場では時間になるとどこからとなく集り来るさやかな人の群、そして人の群に比較すると大きな荷物の山。そして霧にひた／＼ぬれた四十噸位の發動機船に送りこまれると、やっぱり島行きの觸感がまわり中から自分を包んだ。船室といつてもゴザ敷きの中にお互が身を鰯のように横えるだけである。丁度その時隣に身を横えていたのが、これも始めて爺岳チアチヤの麓の乳呑路チノミチの役場に赴こうとしていた青沼君、兄さんが既にその地に赴任していたので自分も行くのだという。身についた背廣姿、人も極めて好きそうな人柄、初めての島旅で人戀しさもあつたのだろう。お互に話しこみ話しこまれるまゝに語りあい「乳呑路に着いたらやつて來なさい」というので、船中で乳呑路行きの約束も出された。

いっしか眠つてしまつて、船のどこかに着いたらしい氣配に、上に出てみると東沸だと誰かがつぶやいていた。何も見えない。それでも「もう千島に來たのだ」という感じが身にしみた。ついで沖古丹オキノコタン、瀬石セセキと途

中に密つて、古釜布に向う。沖の古丹と瀬石の間で朝食が出たが、あまりの簡素さに飽氣にとられたものである。

古釜布では小學校に飛びこんでいつた所、校長の安孫子さん（島の方を引きあげてから根室の水産會に奉職）がとても好い人で、家の方は狭いからもう休みだし教室の方を何とかしてあげましよう、と、教室に居室と研究室を併用させて、その上、三度の食事も心配して下さつた。お風呂は近くにあつた泉氏の罐詰工場にもらに行き、歸りには罐詰の残りものなるヒモもらつてきておいしく食べたものである。御厚情にあまえつゝ數日ここに滞在し、古釜布附近は隅なく採集した。古釜布には俗稱大谷地オウヤチなる濕原がある。ここが盆栽となるアカエゾマツ（ヤチシンコ）の弗箱で、日本の盆栽家の寶庫でもあつた。私は採取名人の案内で、その谷地のすみぐも歩き、當時まで國後に知られなかつた多くの植物を採り、歡喜の聲をあげた。たとえはナガバノモウセンゴケなど今に至るまであんなに澤山生えていた所を見たことはない。

それから瀬石に宿を移し、なるたけ宿賃を廉くしてもらい、たしか湯治客並に扱つてもらつたと思う。ことを根據とし沖古丹ニキシヨロ、二木城、硫黃山などを探つた。

二木城の宿は飯場ハンバ（造林小屋？）で、丁度満月の前後に行つた。野天風呂から、月光を浴びたシマヌブリがまなかに見え、二木城湖も近く、旅の心は飽和状態に素光にとけこんだ。この數夜こそ千島の風光が心髓に透徹した第一歩であつたろう。夜になると風呂の中で月影に心を揺すぶられ、食後の一時を湖畔に出て、飽なく風景をむさぼり楽しんだものである。また現代分類學界の重鎮大井次三郎博士（上野科學博物館勤務）の若き日に會つたのもここである。

古釜布から乳呑路には便船があつたのでそれに乘ることにした。確か千島丸という名であつたと思ふが、横車のついた古風な船である。船長がヒリヒリツと呼子を吹くとエンジンがかゝつて、ガツタン、ゴットンガツタン、ゴットンといともいとものびやかな音を響かせて、おもむろにうす霧の宵を出港（？）したように記憶している。河蒸汽スタイルの船に千島で乗つたという思出をたぐりだすと、自分ももう年寄の部類だなどと考えざるを得ない。この船はまたいとも閑散で、隣にいたのが大中華民國の行商である。色々のものを見せてくれた。蠟石みたいなものからできた言わざる見ざる聞かざるの三猿を、元價でやすくわけてくれた何かの記念にもと自分でも買う氣がおきたものか、相

手が商賣上手だつたのか。ほのぐらい釣フンプの下でわびしい夕食。しかし私の前には、小生に好意をよせたらしいホイイ氏の特別なはからいでうまい鯨と玉葱の煮込みがついていた。私はここで始めて鯨のうまさを知らされた。

乳呑路半月の生活は愉快だつた。青沼氏の官舎は海を見わたす丘の上にあつた。獨身兄弟の自炊生活に、また變り種がとびこんだという次第である。御兩人とも實に親切で、滞在中を全部研究に時間を費すように親身となつて取扱つてくれた。兄さんの方は弟さんより線が太く、札師時代には秀才を以て知られた。そして啄木調の歌をもよくし、霧の夜にはストーブをかこんで藝術論から哲學、宗教論にまで及ぶ。それにまたここに村の住職がよく遊びに來た。時には四人車座となつて焼酎も飲んだ。そして酔うまゝに濱邊に出て、何やらわめきあい、ある夜は遂に鐵拳とぶの雜風景さえもおきたが、坊さんが丸い頭で「昨夜はどうも」とニコ／＼入つてくると、又なごやかな風景が醸しだされた。この青沼の兄さんは、男らしいそして竹を割つたような人なので、女に好かれる女難の相をもつていたらしい。「今日は誰か來るかもしれんから君は標本の手入をしなげなるだけ無愛想にあしらつてくれ」

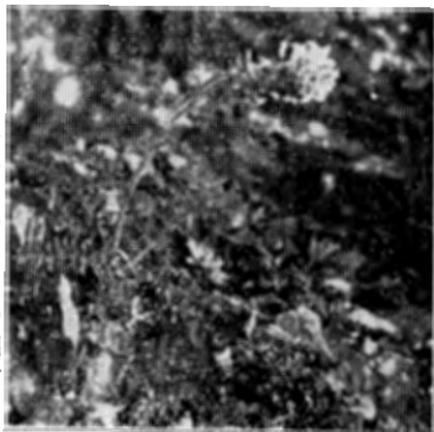
とでかけた雨の日もある。夕暮近く、弟さんが役場にまだ居る頃を見計らつてか、女の人があられた。學生時代の自分にも「島には稀な人だな」と感じさせる教養さと清楚さを身につけていた。「先生は？」と私一人に面喰つたらしいが、しとやかに聞かれる。「さあどこに行きましたかな」と一きわぶつきら棒に挨拶する。物のあわれを知らなかつた時代の僕である。今になると悪かつたなあとこそばゆい悔を感じるが、その時は青沼さんに忠實さを示したまでの話である。今なればフレンドをでない、それも悪く言つて押しかけフレンドをでないものであつたにちがいない。島の麗人によつて、私達は時々よき餌にありついた。見るに見兼ねた獨身生活をあわれんでつくしてくれた母性愛と善意の解釋をつけ、今どこにいるか判らないこの麗人の多幸をせめてもの罪滅しに祈る次第である。

ある日はまた密漁の道具を三人でこしらえていた。

この密漁は爺岳に源を發し乳呑路の西を流れるオンネベツ川の鮭鱒に對して試みらるべきものである。そして丁度ヤスの手入をしている時に、「やあ今晚は」と許しも乞わずのつそり入つてきたのが、駐在の部長さん。今更長い竿のかくししようもない。「何だい」それはこれも人の好きそうな答をふくんでの言葉である。

「これは道具ですよ」「何のさ」「道具ですよ」の一押の答。歸りしな「二匹だけ許すよ」「だけど一匹はうちの台所にほうりこんでいつてくれよ」あの頃の島人への思出はどこにもここにも豫猶のあるのどかなユ一モラスな善人さがあつたように思え、今日になるとそぞろ「その頃なつかしさ」の回顧にうたれざるを得ない。その翌日快晴を利し、晴丸があつた爺岳にみいりつゝ、また華やかに明るい太陽の光を浴みつゝ、密漁に従事した。しかしトウシロウのかなしさ、三人がかりで三匹しかとれず、膝までの深さになると、足の両側をスイく泳いでゆくオサカナさんはどうにも意のままにならぬことをはつきりと教えこまれ、歸り途誰もいない駐在さんの台所に三匹のうち中位の一匹を投げこんで行つた。この日の私の收穫はオウバヤナギの分布東限をここに得たことである。

爺岳には登りそこなつてしまつたが、乳呑路附近は相當くまなく歩いた。爺岳に登るために賽河原の佐々木宅に五日ばかり泊りこんだ。宅というものの簡易な漁宅である。佐々木君は五十を越した年輩で内儀さんと二人で住んでいた。島の大砲（ホラフキ）と稱されたが、なか／＼話術かうまく、熊狩だの、トツカリ打ちだの、海馬狩だの話を、毎夜興味深く聞かされるし



聞いたものでもある。海馬の鹽漬はお世辭にもうまいとはいえぬ代物であつた。滞在五日、霧にふりこめられたまゝ食料もなくなつたので乳呑路にもどつた。

昭和十一年の八月下旬、泊岳を中心とした植物研究がしたくなつたので、道廳の林常夫氏に申出たところ快諾され、二週間ばかりの旅をしたことがある。この時には千島ずれのした私は「泊岳など大した所ではあるまい」と高をくゝつて出かけた。根室に着いた日はシケで、明日も船はあるまいとの話。その翌朝少つくり寝ころんでいたら、「先生國後行が今朝でる相ですよ」と宿の太つた女中さんにたゞきおこされる。船は何時頃出たかすつかり忘れてしまつたが、國後水道ではかなりガブつた。しかし根室の方に向つて長く出た計羅突夷ケラムイの燈台をまわつた頃から、場ざしも見えてすつかり和ぎてきた。船から見た泊は砂丘に見えかくれ

のわびしい村であつた。この旅行では根據を泊の驛遞なる中山旅館においた。長く突出した砂濱上にあるケムライ岬の燈台に行く時には、片道二里のところまでは運好く出漁する漁船を利用できた。そして船中でアマモの類を採取し、二籽ばかり歩いて燈台を訪問した。この燈台は場所が場所なので訪問者は極めて少ないらしく、歡待して下さつた。その時ふるまわれたクロミノウグイスカグラ（方言ネズミフレツブ）の果汁の味は今も忘れ難い。いつの年だつたか、中部千島研究の歸途、宮武さんがこんなよい入港を寢ている奴があるものかと、ウルツブ丸のサロンからひつぱり出され、この燈台の灯の見える頃から根室入港までの月明をゆつくり楽しんだこともある。ケラムイ岬は國後島の南西端、砂丘と濕原と草原とから平坦な岬で、何時かは訪れたいと思つたその先端にある砂洲のはしの燈台を訪れた私にもひとしおな感慨はわいた。ハマナスの綺麗な砂丘、そして高距こそ低いがゆるやかな美しい山麓線をひく泊岳を背景に見事なオタカラコウの群落、キヤツチしたつもりの寫眞が、後で現像してみたらずんで一寸も感じが出ず、首をひっこめた。その日は暑さがひどく、歸途には日陰というものがひとつもななく上からの照りと下からのむれでどうにもこうにもな

らず、体をもてあましたが、とうとう多量の鼻血を出して弱つたこともある。この日、國後にもアツケシノウのあることが判つた。

泊岳には馬で行つた。泊署の方でも何かの調査があつたらしく、營林署からも二人案内がついてくれて、六頭ばかり馬をつらねて、爽快な裾野の朝露をわけてと書いて行くと馬鹿に颯爽としてくるが、實は馬というものに乗つたのはこの時が始めてで、ヘツヒリ腰の姿は見えていられなかつたのではなかつたかと思う。四籽ばかりの松崎牧場からいよ／＼泊山に入る。そして硫黄山への下り道、泊火山の外輪壁のひとつの肩にいた時には思わず自分は息をのんでしまった。泊岳は二重式の火山で、中に一菱^{イチヒシナイ}内湖が紺碧に澄み、中央火口丘の位置に硫黄山が湖によつて荒肌を見せ、泊岳北東の外輪山は、なだらかな山積線を描き、その向うには海を距ててラウス岳から知床岳への山々が残雪もゆたかに濃いブルーの深彫^{フカホリ}になつている。誰が透徹した初秋へのこの壯麗な火山風景を豫期していたか。

そこから泊山の頂上に行き、少し早かつたが中食。山頂で一時間ばかり遊び、山背を傳いつゝある一峯から、今度は硫黄山のポントウ附近へ直下する山積に向つて急斜面をおりる。三分二ばかり下つた所で、こらえかねた私は馬を下りてひき始めたが、斜面の急なため、馬の首は常に私の頭の上にあつた。硫黄を採取し



ているボートで一休み。それから晝のようなどというど野暮つくさいが、全く晝のような湖畔を馬上逍遙とシヤレこんで、古丹消に下つた。下り際の峠で素晴らしい爺岳の遠望を満喫する。古丹消でびつくりしたのは、軽やかな洋装の板についたモダンな娘さんのいたこと。宿の親類で水戸高女の卒業生とか。カールした髪が夕闇にほのかに匂つていた。人柄のせいもあるう。客室には姿を見せなかつた。浴槽に行けば、河を越えて知床の山々が北斗七星のもとにかくわしく肩をならべていた。

ビールの夜は今日ひとひの收穫に熟れて、心樂しかつた。「コノワタ好きですか」と問われるまゝに「大好物」と答えたら、洋皿一杯に山盛りにしたコノワタが銘々の前に出される。さすがイカもの喰いの小生にも、それが懐喜のように見えて、有名な逸品もグロテ

クスに、一寸手が出せない。みんなも同じだつたらしい。切角の好意をと思ひ切つて眼をつむり口に入れるやはりコノワタはコノワタだ。口に入れさえすれば新鮮な醍醐味は芳香を淡白に残して舌にとろける。舌にとけさえすれば眼をあけて、ビールかたむけつゝ、うまさうに數回口に運ぶと、やがてそれに刺戟されてか、まわりの人の箸も除々に各自の皿の上に動いて行つた。その後随分旅したが、この時程フンダンにコノワタを樂しんだことはない。

この旅の歸途、私は農林省の白鳳丸に便乗を許された。あえてこの言葉を用いるのは、陛下がその夏久松待従を御名代として派遣遊ばされ、白鳳丸がその乗船なりしがゆえである。久松待従に千島最後の一泊を泊の驛遞でされたが、驛遞では高張り提灯などを玄關に高々と出してなかなか趣があり、翌日白鳳丸出帆の時には、碇泊してた發動機船がごとく旗など出してつゝ、ましやかな満船飾を施し、村の有志は羽職袴やモニングに威儀を正して、發動機で御見送をした。忘れ難き一コマの風景である。晝食は船中で待従と食卓を共にした。最後の晝食とて、船のシチューワートも心して、タラのともあえ、ウニの鹽辛、ソイの刺身、タラの頭のうしおなど千島の粹を食膳にもつた。今となつては世が變つてしまつたが、それは適當な温雅さと明朗さを持ち、待従、石野敬之氏を中心に、船の人も加わつて、今思出しても快適な食卓であつた。